

春を待つ虫たち

午後4時近くになれば、辺りの空気はどこかセピア色（セピア色って、そもそも何の色？正解は…イカ墨の色です。）の風情。いつもは気にならない空気ですら、秋、冬はそこはかとなく色づきま



すね。
さて、あれほどたくさんいた白井の愉快的仲間「昆虫」たちが、姿を消して久しくなります。冬の間、彼らはどうしているのでしょうか？皆、短い命で、子孫を残して死んでしまったのでしょうか？

いえいえ。もちろん、カブトムシのように、寿命が1年という昆虫もありますが、その全てが1年しか生きられないわけでもありません。では、何年か生きる「昆虫」たちは、冬の間どうしているのでしょうか？寒い冬の日、外で彼らを見かけることはありませんが…。その通りです。寒い日外にいたら、彼らは死んでしまいます。なぜなら、彼らは「変温動物」だからです。（ほら、トカゲ、亀、イグアナ etc.）外の気温に合わせて、体温が上下する生物でしたね。ですから、冬の間は、枯れ草や、倒木の幹の中など、安全で暖かな場所に身を隠し、「休眠」しています。例えば、テントウムシ。これは、集団で越冬している姿が比較的知られている昆虫です。また、白井中では、大変ポピュラーなダンゴムシ。（ダンゴムシは虫ではなかったですね。さて、何の仲間でしょう？正解は…甲殻類。どうして、虫ではないんですか？脚の数を数えてみてね。虫の脚は6本、ダンゴムシは…？）彼らも体を丸めて、枯葉の下などで「休眠」しています。では、あんなにたくさんいたアリたちはどうでしょう？彼女らも（そうです、アリは基本全員メスでしたね。オスは、繁殖の季節にだけ現れます。）土の中で「休眠」しています。（アリの巣の出入り口は、出入りがなくなるので、砂などがかぶり、自然とふさがれてしまいます。）冬の間、虫たちは、蓄えた栄養で命をつなぎます。（もちろん、寒くて動けないので、代謝も下がります。）

さて、ここで、大好きなアリが出てきてしまいましたね。話はそれますが、皆さん、そもそも、アリは、あんなに土の中にいるのに、なぜ、病気にならないんだろう？と思ったことはありませんか？実は、このアリの特異性に目をとめた研究が、今進んでいます。それは、「アリが分泌する抗菌性物質」を人間にも活用できないか、という研究です。土の中には、様々な菌類等があり、なかなか危険です。でも、アリはその中で暮らし、巨大なコロニーを維持・繁栄させています。そこに目をつけ、研究してみたら、なんとアリは、特殊な「抗菌物質」を分泌し、体中に塗っていることが分かったのです。（思い返せば、昆虫類は4億年の歴史を持つ生物。対して、我々現生人類ホモ・サピエンスの歴史は、わずか25~40万年です。）恐れ入りました。大先輩が生き延びられたのには、我々人類の知らない戦略があったからにほかなりません。さあ、これからが冬本番。まだまだ寒い日は続きます。

2月は「如月」。（何て読みますか？「きさらぎ」です。語源の最有力は、「着た上に更に着る＝着更着」ほど寒いから。）それでも、3月6日頃は、「啓蟄」（けいちつ）。暦の上では、「虫たちが、冬ごもりの穴から出てくる日」を迎えます。「白井の愉快的仲間たち」が、帰ってくる「春」までもう少し。「春を告げる蝶」モンシロチョウがひらひらすれば、また新しい、「白井の愉快的仲間たち」がお目見えする季節です。